

新聞大会 岡山で開幕

独立守り使命果たす

新たな一歩へ決議

日本新聞協会主催の第五十九回新聞大会が十七日、岡山市表町の岡山シンフォニーホールで始まり、「新聞の自由と独立を守ることにより、ジャーナリストとしての使命を果たしていくことを誓う」とする大会決議を採択した。十八日まで。



岡山市で始まった第59回新聞大会。式典には全国から約530人のマスコミ関係者が参加した。岡山シンフォニーホール

全国の新聞、通信など百三十九社の代表ら約五百三十人が参加。あいさつで新聞協会の北村正任会長（毎日新聞社社長）は憲法、地方分権、北朝鮮による核実験など国内外の課題に触れ「事実を伝え、読者とともに徹底して議論し、解決の道と一緒に探し求めるジャーナリズムの力が一層強く求められている」と訴えた。

編集部門で「昭和天皇、A級戦犯靖国合祀に不快感」を記した元宮内庁長官の日記・手帳をスクープした日本経済新聞社、「検証 水俣病五十年」を長期連載した西日本新聞社など四社、技術部門で一社に新聞協会賞を贈った。

地元を代表して山陽新聞社の佐々木勝美社長（日本新聞協会副会長）があいさつ。国も地方も新聞界も大きな転換期にあるとの認識を示した上で「数あるメディアの中でも新聞こそは、未来のあるべき姿をしっかりと見据え、地域の思いを十分に付度しながら、公正な言論を展開していかなければならない。今大会を潮目に、新聞が力強く新たな一歩を踏み出せるよう、切に願っている」と述べた。

式典に続いて、国際医療ボランティアAMD A（本部・岡山市）の菅波茂代表が記念講演。昼食会では同市出身のマラソンランナー有森裕子氏がスピーチした。

午後からは研究座談会があり、早稲田大の藤田博司客員教授が基調講演した後、山陽新聞社の越宗孝昌専務をコーディネーターに河北新報社、福井新聞社の社長ら四人が「新聞の公共性・文化性を考える」新聞がジャーナリズムとして生き延びるために」をテーマに話し合う。